

著作の執筆と出版こぼれ話（その一）

所 功（81歳）

前口上一読書と著作への歩み一

岐阜の田舎で生まれた私は、小学校3年生の昭和25年（1950）ころから、図書室の本を借りて読むことが好きになった。それは母の影響かもしれないが、貧しいので新本は年に1冊しか買ってもらえず、当時有償の教科書すら一学年上の従兄から譲られたものを大事に使った。

また中学校で国語担当の井口（のち林）徳子先生に作文の指導を受け、生徒会の新聞などに勝手なことを書いたりした。そのお蔭か、大垣の県立高校へ入り、国語（古文・漢文も）だけ校内一となったこともある（理数科目は全然ダメ）。

さらに名古屋大学では、育英資金を出して頂いた「矢橋謝恩金」の会報「楠の生い立ち」に毎回随筆を寄せた。また四年次に千代田化工建設の懸賞論文「私の大望」に「教師への道」を書いて入選し、大学院二年間も奨学金を頂いた。

しかし、修士課程を卒えたら郷里で高校教員になるつもりであったから、自分の書いたものが雑誌などに載っても、書籍として世に出るとは夢にも想わなかった。それが不思議な縁により、五十余年間で数十冊の著作となった。

そこで、八十歳代に入り始めた「終活」の一つとして、既刊著作の執筆と出版のいきさつを、各々簡略なメモとしておく。なお、年次順の記録は「わが八十年の歩み」とし、また内容別の一覧もHPかんせいPLAZAのプロフィール欄に「略歴と著作」（令和五年七月現在）として掲げた。

よって、ここには両者を併用し、年次と内容を踏まえ乍ら、おおよそA「主要人物の研究と顕彰」、B「宮廷儀式・行事の研究」、C「皇室文化の研究と解説」、D「皇室制度の研究と提言」、E「日本文化関係の解説」などに大別して、各々こぼれ話を略記する（著作の番号は前掲の一覧による）。

尚、本稿の入力には、野木邦夫氏（日本学協会研究員）の協力をえた。

A 主要人物の研究と顕彰

53 『三善清行』（吉川弘文館・人物叢書、新書判241頁）初版昭和45年（1970）10月（29歳）→新装版平成元年（1989）

名古屋大学文学部の国史学科卒業論文「三善清行とその時代」の伝記部分を修訂して『藝林』に掲載し、その抜刷を東大（八高出身）の坂本太郎先生（1901～87）に献呈したところ、いずれ「人物叢書」の一冊として出せるようにと激励を頂き、三年後に先生の推薦で執筆を依頼され、一年足らずで書きあげた。

而立以前の未熟な処女作であるが、当時の編集長は黒板伸夫氏（のち清泉女子大学教授）で、編集担当のOさんと共に懇切な助言をして下さった。挿絵の写真を撮るため、結婚して間もない妻（京子）と関係史蹟を廻ったが、その一葉（備中国一宮吉備津神社本殿）には伴侶も片隅に撮っている。

54『三善清行の遺文集成』（方丈堂出版、A5判222頁）平成30年（2018）12月（77歳）

三善清行（847～918）は、延喜18年の12月7日（旧暦）数え72歳で参議兼宮内卿を極官として薨去したので「善相公」とも称される。その邸宅は、五条堀川だけでなく、東郊の白川北の岡崎神社近くにあり、その遺趾を道場とした「善法寺」が『伊呂波字類抄』や『中古京師内外地図』などにみえる。

そこで、千百年祭を迎える平成30年12月までに清行作の現存遺文を諸書から集成し、すべての原漢文を読み下し文にして、解説を加え出版した。主要な遺文は、1建議（『意見十二箇条』など9篇）、2伝記（『円珍和尚伝』『藤原保則伝』）、3随想（『詰眼文』『善家秘記』逸文）、4詩文（「詩序」など6篇）および5参考（『恒貞親王伝』『阿衡勘文』『延喜格序』）である。（48『未刊論考デジタル集成』③には、2伝記の両伝に関する考察など所収）

本書の原稿は、すべて友人の野木邦夫氏（伊勢青々塾同学）にデータ入力してもらい、また刊行は、京都の井筒企画で知りあった方丈堂出版（光本稔社長）に依頼した。

なお、この機会に岡崎神社の境内（神楽殿脇）に「三善清行卿邸趾」記念碑（御影石）を建立させて頂いた。その表面に『扶桑皇統記図絵』所載の肖像を刻み、裏面に簡略な説明文を加えた。

55『菅原道真の実像』（臨川書店、B6判242頁）平成14年（2002）3月（60歳）

菅原道真（845～903）は、三善清行より2歳上の文人官吏（従二位・右大臣まで昇進）であり、流謫地の大宰府で薨去後も「天満天神」「文道の祖」と信じ仰がれてきた。この「菅公」に私も早くから興味をもち、卒論で取り組みたいと考えたことがある。

しかし、指導の彌永貞三助教授もその恩師の坂本太郎博士も、道真を本格的に研究されていることが判ったので、気遅れして同時代の研究が少い三善清行に注目しテーマとした。とはいえ、「菅公」への関心は持ち続け、折々に解説や論考を書いてきた。

そのうち、六篇を補訂し、参考資料を付して纏め、千百回忌にあわせて本書を出版した。これを叢書の一冊に加えた京都の臨川書店とは、前年（2001）12月、私の還暦記念に学友たち（代表竹居明男同志社大学教授）が作成してくれられた論文集『国書・逸文の研究』の販売を引き受けてもらった縁などがある。

なお、82『公卿補任図解総覧』（A5判206頁）は、平成18年（2006）春から6年間出講した同志社大学文学研究科（「日本古代文化史」担当）で55などを使って講義したが、そこへ聴講に来た坂田桂一氏の作成した大宝元年（701）より明治元年（1868）までの「公卿補任」図解（1頁10年分）に勧めて出版したものである。

56『和氣清麻呂公の絵像集成』（護王神社奉賛会、A5判160頁）平成5年（1993）5月（51歳）

57『和氣清麻呂公と護王神社』（護王神社、A5判117頁）平成18年（2006）10月（64歳）

和氣清麻呂（733～799）は、文人の「菅公」と武人の「楠公」に並ぶ「忠臣」として長らく仰がれ、また和氣公を祭神とする「護王神社」は、明治以降、別格官幣社とされてきた。しかし、戦後それが全面的に否定されて久しい。そこで同社の関係者が、その真価を再認識する月例講演会を開いていた。

昭和56年(1981)京都産業大学へ赴任した私は、早速その会に招かれ企画を任された。そこで、新たに「弘文院セミナー」と称し、多くの方々に協力を求めながら、30年余り出講を続けた。その間に依頼されて纏めたのが、56と57である。

まず56では、和氣公の奏言により長岡京から平安京への遷都が勅定されて以来千二百年目の平成5年(1993)、近世以来諸書に描かれた清麻呂の絵像を集成し解説を加えた。

また57では、清麻呂公が延暦18年(799)薨去されてから千二百年、および護王神社が明治7年(1874)別格官幣社に列格されてから百二十年の機会に作った小冊子(略伝と社史)を合せて増訂し、桓武天皇千二百年祭(2006年)を記念して出版した。

なお、著作とはいえないが、皇學館大学に着任早々、神戸の篤志家に頼まれて『楠公の史蹟点描』(五典書院、非売品)を編んだ。これは『太平記』から楠木正行の関係記事を抄出し解説を加えた冊子である。

58『松陰から妹達への遺訓』(勉誠出版、B6判180頁)平成27年(2015)8月(73歳)

吉田松陰(1830~59)は独身を通したが、三人の妹は結婚し子女を儲けている。その末妹・文(のち楫取美和子)が、平成27年NHK大河ドラマ「花燃ゆ」のヒロインとして注目された。しかし、松陰が獄中などから頻繁に長文の書翰を送ったのは、二歳下の長妹・千代(のち児玉芳子)である。

その書翰(いずれも安政年間)中、千代あて五通、中妹・寿(のち小田村寿子)あて一通、叔父・玉木文之進あて一通には、女性(嫁・妻・母)としての心得が懇切に記されている。それらは今なお学ぶことが多いと考え、各々の全文に詳しい補注を加え、母滝子の行状と妹千代の回想も収めた。

なお、これを敢て作ったのは、定年後に移り住んだ小田原で、名門高校(神奈川県立旧制二中)の初代校長を務めた吉田庫三(千代の長男、1867~1922)が、伯父の五十年祭に編集出版した遺文集『松陰先生遺著』(全集の原資料集)を入手して通読し、書翰に感銘を受けていたからである。

なお、81『「成人」とは何か』(A5判、70頁)には、安政2年(1855)正月、野山獄中の吉田松陰(26歳)が甥の玉木毅甫(15歳)の「加冠」(成人式)に際して贈った簡潔な教訓書『士規七則』への理解を深めるため、その真蹟・写本を調べ、全文注解と普遍的な意義を論じたものである。

また、松陰が京都の寓居を訪ね、萩の獄中から朝廷への建策を贈った漢詩人の梁川星巖(1789~1858)と伴侶の紅蘭(1804~79)の生涯は、82『梁川星巖・紅蘭オシドリ夫妻に学ぶ』(A5判32頁)に略述し、その肖像入り銘板を寓居「鴨沂小隠」の旧趾近く(京阪「神宮丸太町」出口)を造り京都市に寄贈した。

さらに、松陰の「松下村塾」に倣い、平泉澄博士の志を継いで昭和39年(1964)から「伊勢青々塾」を開設された田中卓博士は、平成30年(2018)11月、満95歳手前で長逝された。百日祭にあわせて、教え子の有志たちに呼びかけ作成したのが69『田中卓先生を偲ぶ』(B5判206頁)である。

(かんせい P L A Z A 令和5年7月23日)